

秋田県における古代・中世の火葬墓

庄内 昭 男

I はじめに

わが国に仏教思想にもとづく火葬の風習がとり入れられたのは、7世紀前半頃までさかのぼると考えられており、畿内を中心にした発展がみられる。そこで火葬による墓は、※高塚の築造をしなくなる。※火葬された骨が容器に納められている。※副葬品をともなわないものが多く、ともなっても貨銭など数少ない。※墓誌をともなうものもある。などの特色を示している。

東北地方には律令体制の進展ともなって火葬の風習がもたらされたと推測されるが、その具体的様相については判然としない。現在山形県地方の火葬墓の諸例が報告されているだけである。

秋田県では昭和34年に刊行された『秋田県史』に六ヶ所の火葬墓が紹介されているが、近年秋田市湯向火葬墓など県中央部で新発見が知らされている。

本稿では墓制史上における県内火葬墓の年代的位置づけのため火葬墓の新たな集成を行い、とくに骨を納めた骨蔵器について詳細な観察を加えてみた。なおⅡでは各火葬墓について、①火葬墓の所在地 ②位置と環境 ③埋葬状況 ④骨蔵器 の順で紹介し、Ⅲにまとめとして年代観を含めた考察を行っている。

Ⅱ 県内における火葬墓の諸例

県南から北に順次紹介して行く。

1. 岩土山火葬墓

○所在地 雄勝郡羽後町西馬音内堀回字岩土山



地図1

○位置と環境 遺跡は出羽丘陵の東端の台地上にあり、西馬音内の中心より西に約2kmの位置にある。岩土山地区は南より谷が深く入り込んで稜線は馬蹄形を呈しており、その最も奥まった稜線付近で一基の火葬墓が発見された。遺跡付近の標高は120m前後であり、土師器の散布地として知られている。

○埋葬状況 火葬墓は昭和33年10月、山林開墾作業中に発見され、その埋葬状況については豊島昂氏の報文があり¹⁾、要約すると以下のとおりである。

地山が自然に落ち込んだ窪地に木炭片をしいて骨蔵器を置き、本体の下半も厚さ5cmの木炭片で囲っていた。さらに骨蔵器を覆って直径2.5mの土盛があったとしている。

○骨蔵器²⁾ 骨蔵器は橙色を呈するあかやき土器の甕を本体とし、橙色を呈するあかやき土器の鉢を蓋としている。鉢は大形で本体にすっぽりかぶさる。なお本体の内部には木炭粉の付着がみられる。

甕は高さ23.3cm・口径18.6cm・底径9.7cmである。長胴を呈する体部をへて頸部で「く」の字形に屈曲し外反する口縁部につながる。口唇は直立している。なお体部中位で最大径19.9cmを測る。成形は輪積みで行われており、後にロクロ仕上げしているが、口縁部の仕上りはやや波打っている。器内面の底部には指頭おさえ痕跡が残るが、体部から口縁部ではナデ仕上げにより滑らかである。器表面の底部から体部上半にかけては四段におよぶ縦方向のヘラケズリ調整が行われている。1回のヘラケズリの幅は1~1.5cmである。なお胎土中に砂粒の混入が目立ち、器表面底部に多く付着している。

鉢は高さ13.3cm・口径34.3cm・底径11.2cmである。底部より外傾し、口縁部でさらに外反している。成形は輪積みで行われており、後にロクロ仕上げしているが、器面は凸凹して口縁部もやや波打っている。なお

胎土中に砂粒の混入が目立つが、とくに底部で密度が高い。

2. 朝倉火葬墓

○所在地 横手市小吉山（旧朝倉村）



地図 2

○位置と環境 横手市街の北約1km、北流する横手川に注ぐ古沢川の南に標高76m前後の小吉山と称する独立丘陵がある。昭和3年、小吉山の南縁にあたる雷神社付近の塚より二基の石製骨蔵器が発見されている。この地域には小吉山と沢を隔てて東に台処館、南に大鳥井山とよばれる丘陵部があり、一帯は中世豪族の居館と考えられてきた。現在スポーツ公園の造成計画により緊急発掘調査が進められている。

○埋葬状況 昭和3年1月、宝さがしを目的とした青年達によって掘り出されたため埋葬状況のくわしい記録は残っていない。掘り出された二ヶ月後に横手郷土史編纂会が立ち入り調査を行い状況報告している³⁾。要約すると以下のとおりである。

塚は高さ四尺・幅南北三間東西二間の積石式のもので、中に石製骨蔵器が東西に二つならべて納められていたとしている。立ち入り調査の時点で骨蔵器は割れ骨片が散乱していたとしている。

○骨蔵器 横手郷土史編纂会は東側にあった骨蔵器を甲、西側にあった骨蔵器を乙として報告している。甲は方形の本体に納骨用の穴を穿ち、一まわり大きい蓋をかぶせている。乙は本体と蓋が合わせてつくられ、長方形を呈している。本体と蓋の両方に納骨用の穴を穿っている。

現在横手市教育委員会に甲と思われる石製骨蔵器が所蔵されている⁴⁾。本体は上部で一辺40cmの方形を呈し、底部は径36cmの不整円形を呈している。中央に穴を穿って納骨部としており、内径21cm・深さ12cmを測る。蓋は一辺42cmの方形を呈し、中央部の厚さ13cm、縁部の厚さ7cmで、上部を方形に残し、四方を削りと

っている。本体と蓋を合わせた高さは35cmである。石質は凝灰岩である。

3. 保土森火葬墓

○所在地 横手市金沢中野字三貫堰



地図 3

○位置と環境 遺跡は奥羽本線後三年駅から東に約1km、西沼に近い微高地上の畑地にあり、骨蔵器が一基発見されている。北東方向に約2km離れた丘陵部には中世豪族の館跡である金沢柵および閑居長根経塚がある。

○埋葬状況 発見年代・出土状況は不明である。

○骨蔵器⁵⁾ 内部には骨粉と木炭粉が残っている。骨蔵器は灰色を呈する須恵器の長頸壺で、高さ26.0cm・口径12.1cm・高台径9.1cmを測り、口縁部が三分の一程欠損している。球形の体部にゆるやかに外反する口頸部をつけており、口縁部に稜をもつ。底部には「ハ」の字形に開く高台をつけている。ロクロ仕上げしているが、高台内側には指頭おさえの痕跡があり、器表面の体部下半には斜方向および縦方向のヘラケズリの調整痕が、体部上半にはカキ目の調整痕が残っている。

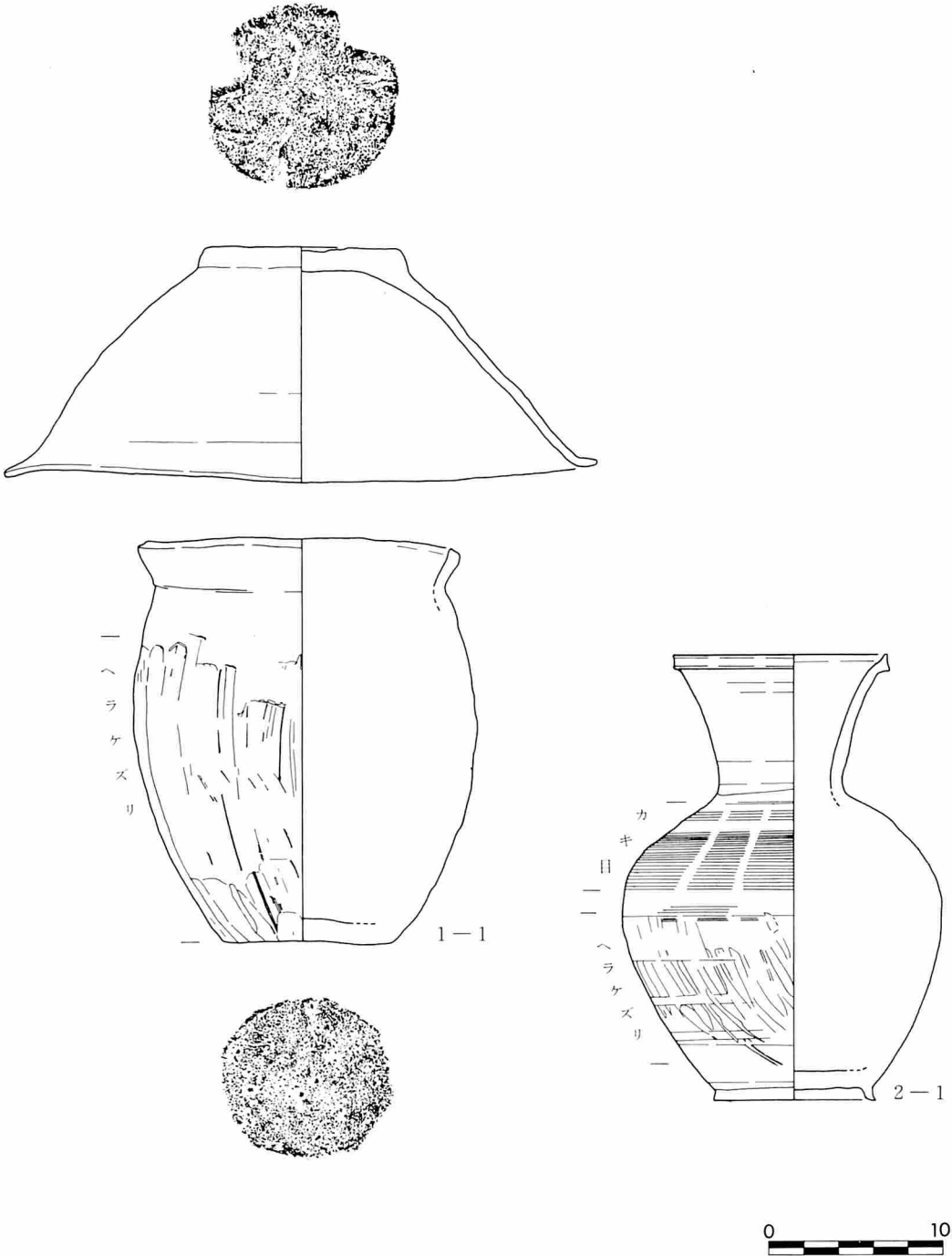
4. 濁向火葬墓

○所在地 秋田市金足小泉字濁向



地図 4

○位置と環境 遺跡は小泉濁男濁の西の砂丘地にあり、当博物館より西北方向に約500mの距離にある。男濁を東に見おろす砂山の中腹から7基の火葬墓が発



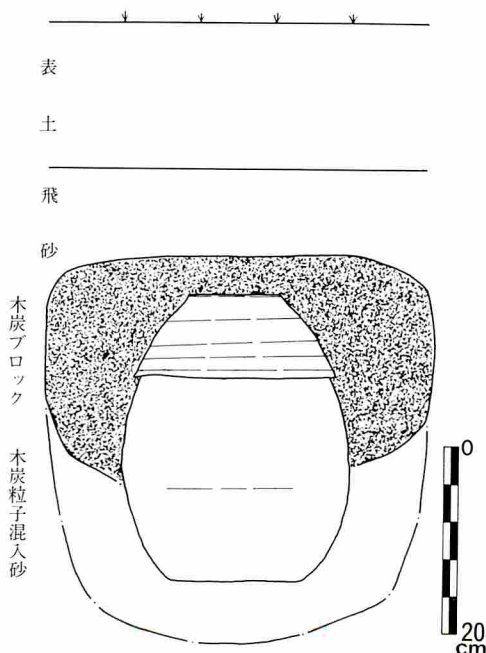
第1図 岩土山・保土森火葬墓の骨蔵器

見された。砂山の頂上で標高20m前後である。現状は松林で、周辺は弥生土器・土師器・須恵器の散布地として知られており、昭和32年には和同開珎が3点発見されている。

○埋葬状況 7基のうちの6基は昭和48年に金足農高生が踏査の際に発見したものである。各火葬墓の埋葬状況についての記録はとっておらず、概要を次のように報告している⁶⁾。

6基の火葬墓には1号から6号までの番号が打たれている。1・2・3・5・6号は中腹の同程度の高さで2～3.9mの間隔を保って発見され、4号だけが2・3号から2m程離れた上段に発見された。1・2・3・5・6号は骨蔵器の本体に蓋をかぶせ、上半部を木炭で覆った状態に、4号は木炭を敷いた上に甕を倒置させ、まわりを多量の木炭で囲った状態にしてあった。6基のうち2号とした骨蔵器をのぞいて内部には骨片が遺存していた⁷⁾。

7基目は昭和58年7月に発見されたものである。筆者と元金足農高生の谷口氏が上記6基の出土状況再確認のため5号付近精査中に偶然検出した。5号から北東に0.9m離れており、ここでは便宜的に7号と呼称しておく。7号の検出状況は次のとおりである。



第2図 7号火葬墓の検出状況

腐植土下10cmで木炭が見つかり、木炭を残しながら表土と下の飛砂層をとりぞくと直径40cmの隅丸方形にまとまった木炭ブロックが出てきた。木炭ブロック上部を3cm程よせると骨蔵器の蓋にした鉢の底部がのぞいてみえた。断面が記録できるように底部を中心に西側半分の木炭および砂をとりぞき、骨蔵器の本体をあらわした。木炭ブロックはかなり大きなものを強固に組み合わせており、厚さ25cmで骨蔵器の蓋および本体上半を覆うようにしていた。表土から骨蔵器の底部までは55cmの深さがあったが、火葬墓は飛砂層中に設置されており、掘り方は判然としなかった。骨蔵器の遺存状態は良好で、わずかにひびの入った本体に蓋がわれたままかぶさっており、内部には砂が充填していた。なお内容物については未調査である。

○骨蔵器⁸⁾ 発見された1～7号の火葬墓の骨蔵器について順次説明を加えて行く。なお他に甕二個体が同遺跡発見の骨蔵器として伝えられており、8・9として図示した。

〈1号火葬墓の骨蔵器〉 赤褐色を呈する土師器の小さな甕を本体とし、橙色を呈するあかやき土器の杯を蓋としている。

小甕は高さ12.7cm・口径12.6cm・底径8.0cmである。円筒形で口縁部がわずかに外反しており、口唇はとがっている。成形は輪積みで行われており、器表面の体部に縦方向のハケ目状の調整痕、器内面の頸部に斜方向のハケ目状の調整痕がみられる。また器内面の底部には指頭おさえの痕跡があり、器表面の底部には葉脈の深い木葉痕がついている。

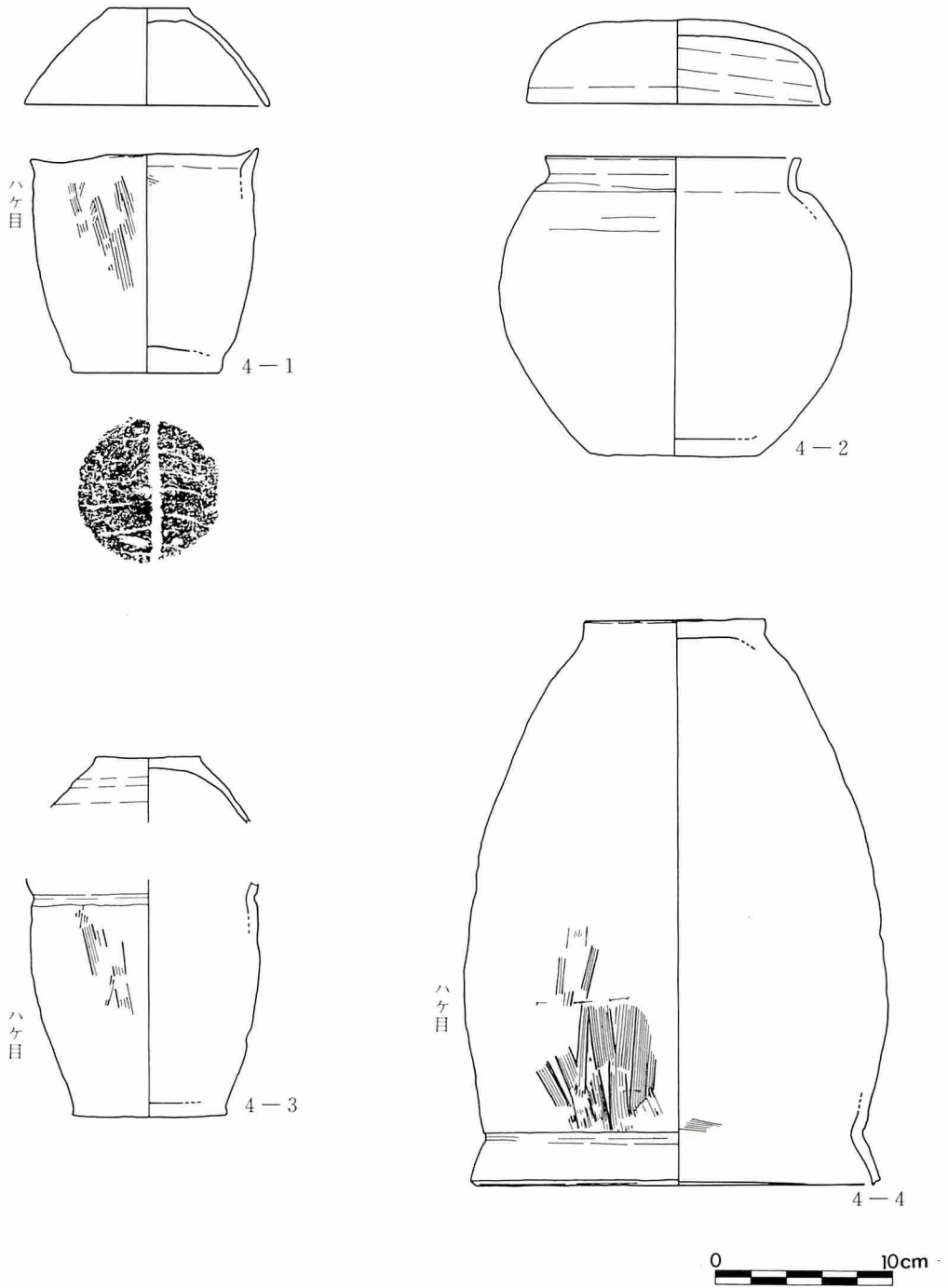
杯は高さ5.4cm・口径13.6cm・底径4.6cmであるが、口縁部から体部が四分の三程欠損している。体部は直線的に外傾する。ロクロ仕上げされており、底部は切り離し後にナデられている。

〈2号火葬墓の骨蔵器〉 橙色を呈するあかやき土器の短頸壺の本体に、橙色を呈するあかやき土器の蓋がつく。

短頸壺は高さ16.9cm・口径14.2cm・底径9.2cmである。球形の体部に短く外反する口縁部がついており、体部中位で最大径19.5cmを測る。成形は輪積みで行われており、後にロクロ仕上げされ、口唇は平坦にならされている。

蓋は高さ4.7cm・口径16.8cmである。碗形を呈して

秋田県における古代・中世の火葬墓



第3図 湯向火葬墓の骨蔵器(1)

おり、口縁部がわずかに外反している。ロクロ使用による凸凹が器内面にみられ、器表面は口縁部をのぞいて指ナデで調整している。

〈3号火葬墓の骨蔵器〉 黄褐色を呈する土師器の小さな甕を本体とし、赤褐色を呈するあかやき土器の杯を蓋としている。

小甕は口縁部が欠損しており、現存する高さ13.6cm 底径8.6cmである。円筒形を呈し、頸部に段をもつ。成形は輪積みで行われており、体部は凸凹している。器表面の体部にはハケ目状の調整痕が見られる。底部は平滑で底辺が張り出している。

杯は体部上半が欠損しており、現存する高さ3.8cm・底径5.8cmである。ロクロ仕上げしているが、底部の切り離しは摩滅してはつきりしない。

〈4号火葬墓の骨蔵器〉 赤褐色を呈する土師器の甕を倒置させて中に骨を納めている。

甕は高さ32.3cm・口径22.8cm・底径10.0cmである。長胴の体部をへて頸部に段がつき、口縁部が外傾している。成形は輪積みで行われている。器表面の体部上半には縦方向のハケ目状の調整痕が、器内面の口縁部から底部付近には横方向のハケ目状の調整痕がみられる。底部は平坦である。なお器表面にススが附着している。

〈5号火葬墓の骨蔵器〉 黄褐色を呈するあかやき土器で、無頸壺の本体に蓋を合わせてつくっている。

本体は高さ19.8cm・口径13.4cm・底径9.8cmである。底部より口縁部まで弓なりに内湾して行き、ほぼ球形を呈する。中位で最大径20.0cmを測る。成形は輪積みで行われており、後にロクロ仕上げしている。下半では器壁が厚く器表面に輪積み痕跡のひびが残っているが、上半では器壁が薄くなりロクロ使用による凸凹がみられる。底部は凸凹している。

蓋は高さ7.0cm・口径19.4cmである。浅鉢形を呈し体部に丸味をもっている。成形は輪積みで行われており、後にロクロ仕上げしている。底部が厚くリング状に盛りあがっている。

〈6号火葬墓の骨蔵器〉 黄褐色を呈する土師器の小さな甕を本体とし、黄褐色と橙色を呈するあかやき土器の杯を二つ重ねて蓋にしている。

小甕は口縁部が欠損しており、現存する高さ17.1cm

・底径10.4cmである。体部中位がわずかにふくらんでいる。成形は輪積みで行われている。器壁は薄く器面も凸凹しているが、とくに器表面には砂粒が多く附着している。なお底部は平滑であるが、中央がふくらみ底辺が張り出している。

上になった杯は高さ5.0cm・口径12.8cm・底径5.8cmで、体部に丸味をもっている。下になった杯は、高さ4.6cm・口径15.0cm・底径6.0cmで、口縁部が四分の三程欠損している。体部上半から口縁部にかけて外反している。いずれもロクロ仕上げされており、底部の切り離しは回転糸切りで行われている。

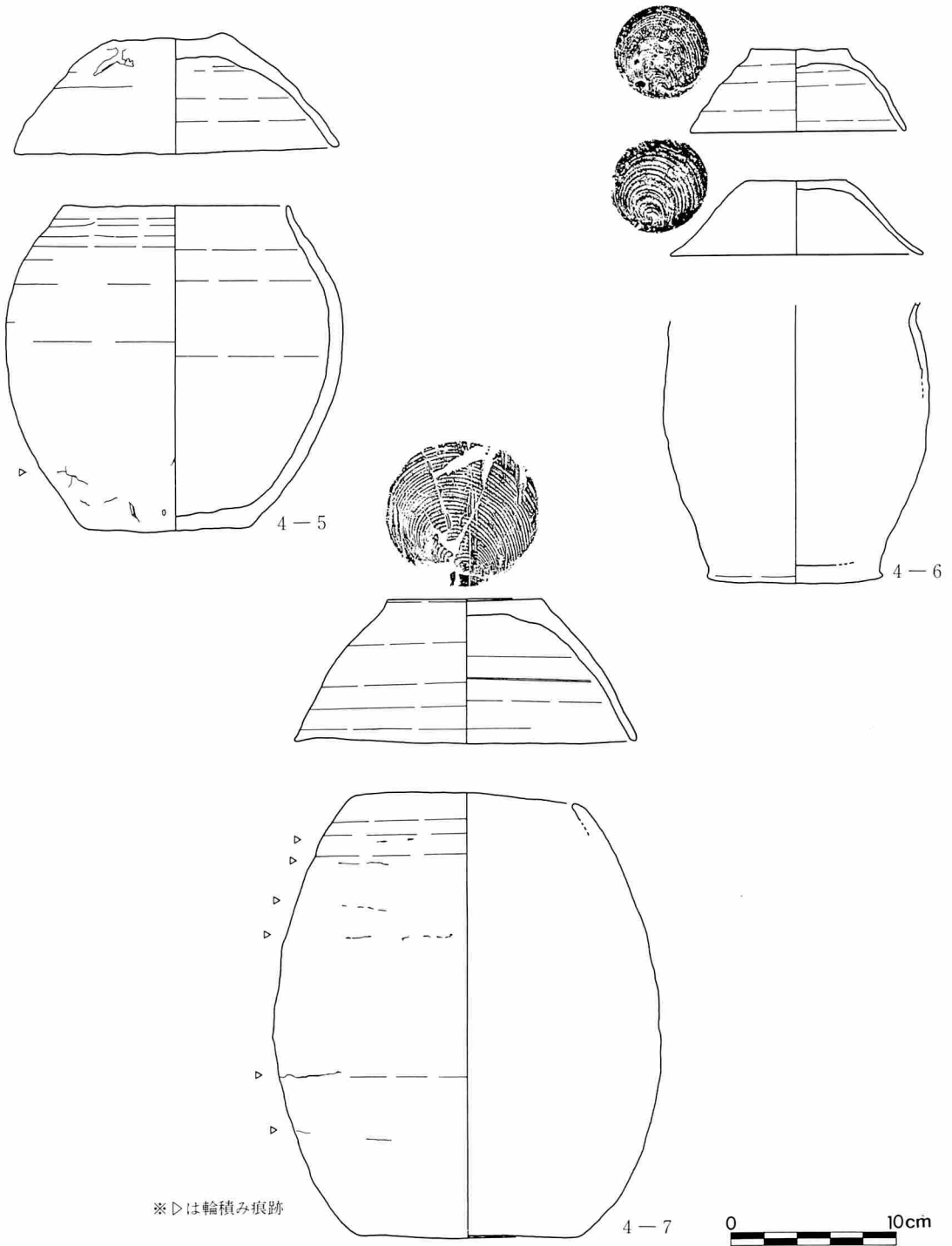
〈7号火葬墓の骨蔵器〉 黄褐色を呈するあかやき土器の無頸壺を本体とし、黄褐色を呈するあかやき土器の鉢を蓋としている。

本体は高さ27.2cm・口径13.3cm・底径13.3cmである。底部より口縁部まで弓なりに内湾している。中位より下で最大径23.2cmを測る。成形は輪積みで行われており、後にロクロ仕上げしている。器表面の体部には輪積み痕跡がひびのように残っているが、口縁部付近ではロクロ使用による凸凹がみられる。なお底部はやや凸凹しており口縁部もやや波打っている。

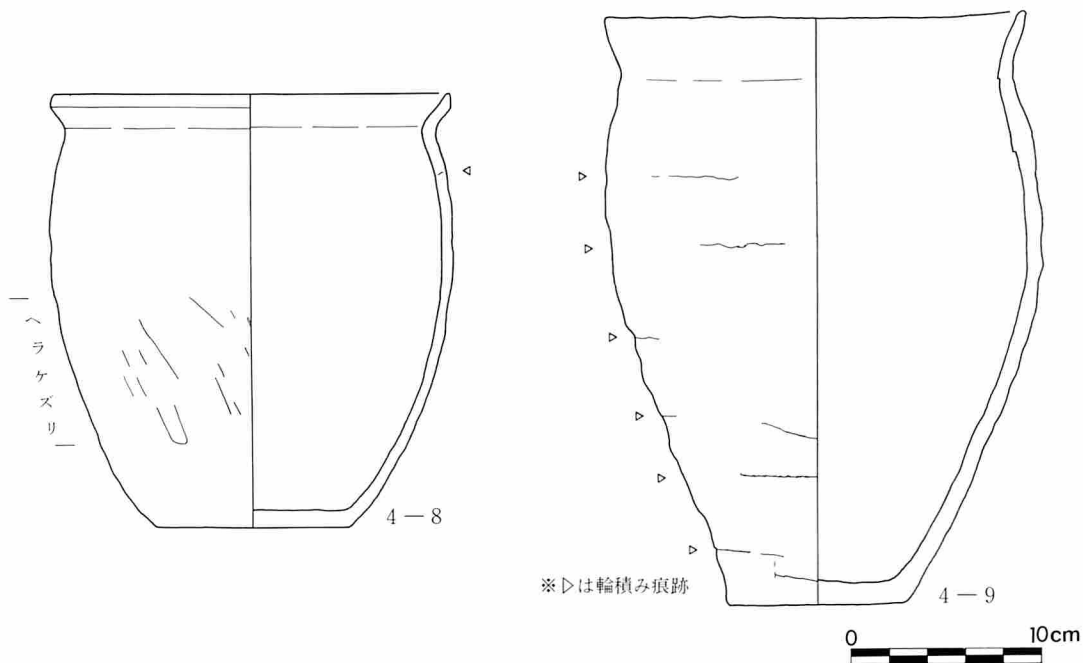
蓋は高さ8.7cm・口径20.5cm・底径9.3cmである。底部より直線的に外傾している。器面にロクロ使用による凸凹がみられ、底部の切り離しは回転糸切りで行われている。

8は赤褐色を呈するあかやき土器の甕である。高さ22.8cm・口径20.4cm・底径9.8cmで、口縁部が三分の二程欠損している。長胴の体部をへて頸部がわずかに屈曲し、口縁部が短く外反している。口縁部に稜をもち、口唇が直立している。成形は輪積みで行われており、後にロクロ仕上げしている。器内面の底部には指頭おさえの痕跡が、器表面の体部下半には縦方向のヘラケズリ調整痕が残っている。底部は平坦である。

9は赤褐色を呈する土師器の甕である。高さ31.2cm・口径21.8cm・底径9.0cmで、口縁部が四分の二程欠損している。長胴の体部をへて頸部でわずかに屈曲し、外反する口縁部につながる。成形は輪積みで行われており、ところどころに輪積み痕跡が残り、器面も凸凹している。体部のつくりは対称的でなく、底部とのバランスも非常にわるい。



第4図 湯向火葬墓の骨蔵器(2)



第5図 湯向火葬墓の骨蔵器(3)

5. 北野火葬墓

○所在地 秋田市金足字北野



地図5

○位置と環境 奥羽本線追分駅より北に約2km、本線と平行して走る国道7号線の東側の畑地で3個体の骨蔵器が発見されている。北野地区は標高12m前後の砂丘地であったが、戦後の開拓で砂丘は削られ、湯を埋め込んで畑地と化している。湯向火葬墓より約1km北に位置する。

○埋葬状況 発見された骨蔵器の中には骨片が入っていたとされているが、その埋葬状況について詳しい報告はない。また1とした骨蔵器は昭和33年、2・3とした骨蔵器は昭和55年の発見であり、相互の位置関係もはっきりしない。

○骨蔵器⁹⁾ 1は赤褐色を呈するあかやき土器の甕で、この本体に深鉢の蓋がともなっていたと報告され

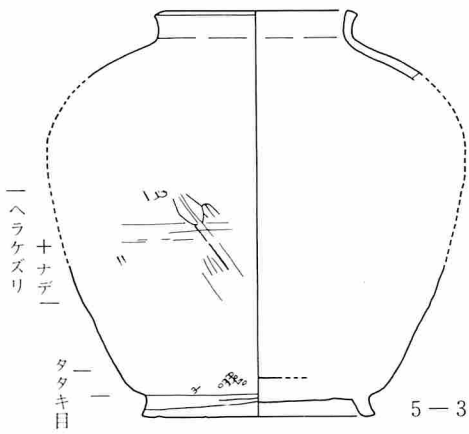
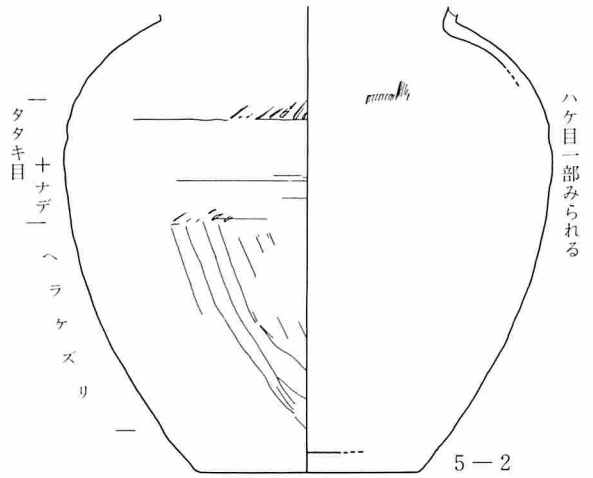
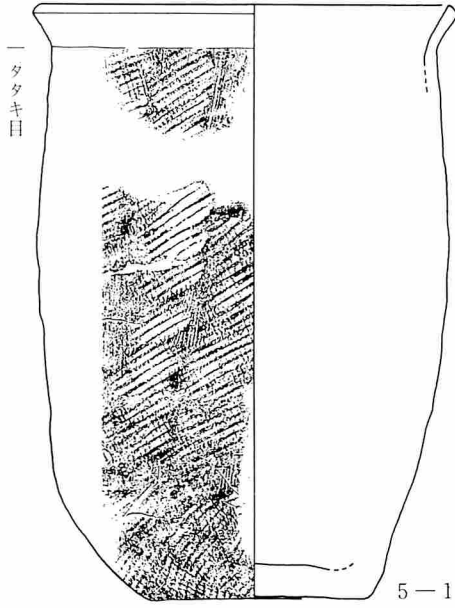
ているが¹⁰⁾、現存していない。

甕は高さ31.5cm・口径22.0cm・底径10.3cmである。円筒形の体部にわずかに外反する口縁部がついている。口縁部に稜をもつ。成形は輪積みで行われており、後にロクロ仕上げしている。器内面は滑らかであるが、口縁部より下の器表面にはタタキ目がみられる。

2は灰色を呈する須恵器の甕で、この本体にともなう蓋はみつからない。甕は高さ24.3cm・底径11.2cmで、口縁部は打ちかかっている。体部上半でふくらみ、最大径25.2cmを測る。ロクロ仕上げしているが、器表面の体部下半には縦方向のヘラケズリの調整痕が、体部中位にはタタキ目が残っている。底部は平坦であるが、砂粒が多く付着している。

3は灰黒色を呈する須恵器の短頸壺で、この本体にともなう蓋はみつからない。短頸壺の上半が大部分欠損しており、復元による高さ21.4cm・口径10.4cm・高台径12.0cmである。肩のはった体部に短く直立する口縁部と底部に「ハ」の字に開く高台がついている。ロクロ仕上げしているが、器表面の底辺付近にはタタキ目、体部中位には斜方向のヘラケズリの調整痕が残っている。高台内側はヘラナデで調整している。

秋田県における古代・中世の火葬墓



第6図 北野火葬墓の骨蔵器

6. 大郷守火葬墓

○所在地 南秋田郡昭和町大郷守

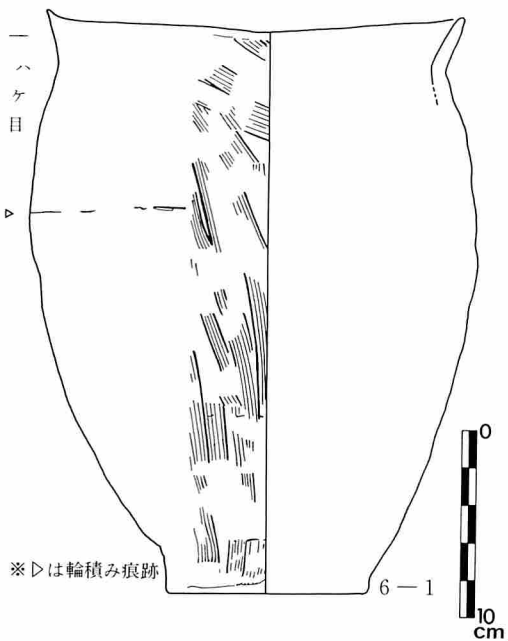


地図 6

○位置と環境 奥羽本線追分駅より北に約4.5km行った砂丘地の畑地で、骨蔵器が1個体発見されている。この砂丘地は八郎潟の南に細長くつらなっており、潟向・北野とは同列にある。周辺の標高は10m前後である。

○埋葬状況 農作業中に掘り出されたため埋葬状況ははっきりしない。骨蔵器内には砂が充填しており、砂をとりのぞいた上部からは木炭片、下部からは骨片が出てきた。なお畑地にも木炭片が散乱している状況がみられた。

○骨蔵器¹¹⁾ 赤褐色を呈する土師器の甕を本体としているが、蓋の存在は不明である。



第7図 大郷守火葬墓の骨蔵器

甕は高さ30.8cm・口径21.8cm・底径10.4cmで、口縁部がわずかに欠損している。長胴の体部をへて頸部で「く」の字形に屈曲し、外反する口縁部につながる。体部上位で最大径23.2cmを測る。成形は輪積みで行われており、器表面の体部および器内面の頸部に輪積み痕跡が残っている。なお口唇をのぞく器表面全体に縦方向のハケ目状の調整痕が、器内面に整然とした横方向のハケ目状の調整痕がみられる。底部は平坦である。

7. 南台火葬墓

○所在地 南秋田郡井川町八田大倉字南台



地図 7

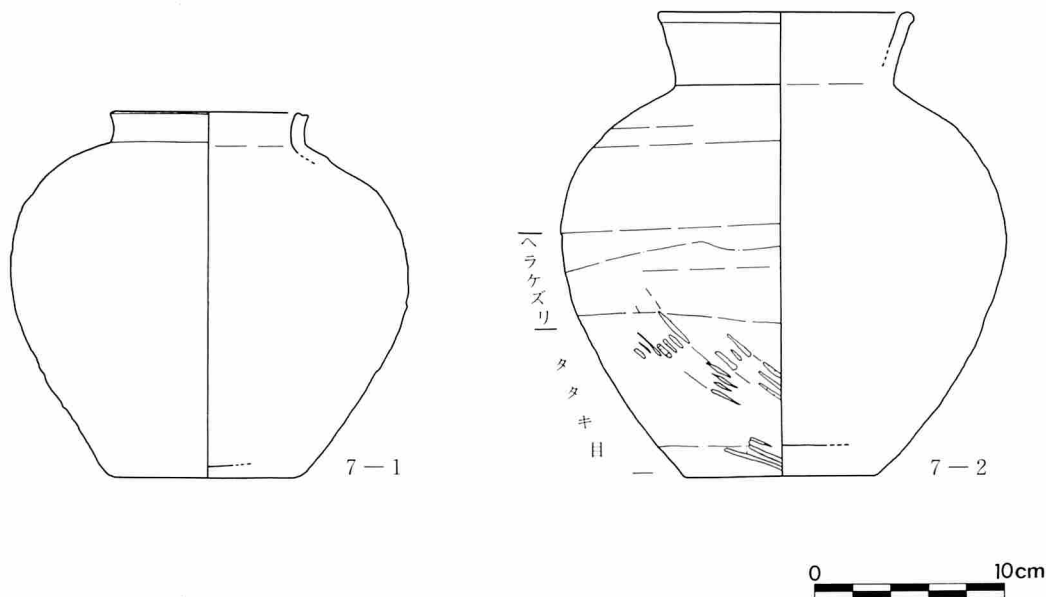
○位置と環境 南台は井川町の中央に長くつらなる台地の西側にあたる。遺跡周辺の標高は35m前後であり、火葬墓は南側の谷に近い場所で発見された。周辺は縄文土器・土師器・須恵器の散布地となっている。

○埋葬状況 昭和30年5月、井川東中学校(昭和35年廃校現在原野)の校庭整地工事の際に2個体の骨蔵器が発見されている。この骨蔵器の出土状況については小武海松四郎氏の報文があり¹²⁾、要約すると以下のとおりである。

表土下30~40cmから1.5mの距離をおいて2つの骨蔵器が発見され、いずれも黒土を浅く掘り込んだ中に置かれ、まわりは10~20cmの厚さの木炭で囲まれていたとしている。

○骨蔵器¹³⁾ 一つは橙色を呈するあかやき土器の短頸壺を、一つは灰黒色を呈する須恵器の壺を本体としており、蓋の存在ははっきりしない。なお、いずれの壺の中にも骨粉および木炭粉が残っており、須恵器壺の中からは角製櫛の残片が見つかった¹⁴⁾。

1のあかやき土器短頸壺は高さ19.4cm・口径10.3cm・底径9.8cmで、口縁部が二分の一程欠損している。球形の体部に直立する短い口縁部がつく。体部上位で最大径20.5cmを測る。成形は輪積みで行われており、後にロクロ仕上げされている。口唇に沈線状の凹みが



第8図 南台火葬墓の骨蔵器

入り、器内面底部に指頭おさえの痕跡がみられる。なお胎土中に小石が混在し、全体に脆く表面が剥落している。

2の須恵器壺は高さ24.5cm・口径13.2cm・底径9.8cmである。球形の体部に外傾する口縁部がつく。口唇は丸味をもっている。体部中位で最大径23.0cmを測る。ロクロ仕上げしているが、器内面の底部には指頭おさえの痕跡が、体部下半では器表面にタタキ目、器内面にそのアテ板痕がみられ、器表面の体部中位には横方向のヘラケズリの調整痕を残している。

以上の火葬墓の他、『秋田県史』では、秋田市上新城小林・秋田市寺内神屋敷に、くわえて昭和42年に刊行された『秋田県の考古学』では、秋田市下新城琵琶沼、河辺郡雄和町田草川山崎に火葬墓の存在することを紹介しているが、いずれも骨蔵器の所在がはっきりしないためここでは省いた。

Ⅲ まとめ

紹介した火葬墓のほとんどは土器製の骨蔵器を直接土中に納めたものであり、骨蔵器のまわりを木炭で囲むことが行われている。木炭の囲み方としては、骨蔵器の上半を覆うようにしているものと木炭を敷いた上

に骨蔵器を置いて下半を囲っているものの二とおりがある。前者には潟向火葬墓の1・2・3・5・6・7号と南台火葬墓の1・2号があり、後者には岩土山火葬墓と甕を倒置させた潟向火葬墓の4号がある。なお火葬墓のまわりに焼土・灰などがみられないことから、いずれも火葬場所とは別に墓がつくられていると考えられる。

土器製の骨蔵器としては土師器・須恵器・あかやき土器があり¹⁵⁾、本体の器形も長胴甕・小甕・無頸壺・短頸壺・長頸壺と多種類である。

骨蔵器に使用されている土器はⅡにおける観察からおよそ平安時代に入った年代が考えられる。

ここで位置関係・埋葬状況からほぼ同時期の一群としてとらえられる潟向火葬墓についてみると、日常的に使用されていたであろう器を利用して本体・蓋にしているものと特別に骨を納めるための容器として本体・蓋が合わせてつくられたものに分けられるが、前者に利用されているのは土師器小甕¹⁶⁾とあかやき土器杯・土師器長胴甕であり、後者はあかやき土器の短頸壺あるいは無頸壺¹⁷⁾に蓋を合わせてある。一群としては、ロクロ不使用の土師器とロクロ使用のあかやき土器で構成されている。

各火葬墓を土師器・須恵器・あかやき土器の構成面

で分類してみると、土師器だけの構成が大郷守火葬墓、あかやき土器だけの構成が岩土山火葬墓、須恵器だけの構成が保土森火葬墓、須恵器とあかやき土器の構成が南台火葬墓と北野火葬墓となる。

秋田県では酸化焰焼成の土器にロクロの技術が導入された時期を9C中頃に比定できることから¹⁸⁾、大郷守火葬墓を最も古い9C前半頃に、潟向火葬墓と岩土山火葬墓を9C後半頃に、南台火葬墓と北野火葬墓さらに保土森火葬墓を9C後半から10C前半頃に年代が推定される。

なお朝倉火葬墓からは石製の骨蔵器が出土しており、外相および埋葬状況においても、上記の火葬墓とは異った様相を示している。いまのところ年代を決める証佐はないが、館跡に所在することと山形県の石製骨蔵器出土例¹⁹⁾から中世に入るものと推定している。

あとがき

本稿は資料紹介で終わってしまった感があり、火葬墓の出現時期、古代から中世へ墓制の変遷など問題を残したままである。今後調査を進めながら少しでもあとづけて行きたい。

最後になりましたが、資料の提供および調査に協力していただいた追分郵便局谷口重光氏、羽後町教育委員会鈴木俊男氏、井川町郷土資料館長斎藤肇氏、昭和町教育委員会瀬下三男氏に記して感謝いたします。

註

- 1) 豊島 昂(1959)：「元西出土骨蔵器」『秋田考古学第12号』
- 2) 県指定有形文化財、羽後町石垣敬太郎氏所蔵。
- 3) 横手郷土史編纂会(1933)：『横手郷土史』
- 4) 横手市教育委員会(1980)：『大鳥井山Ⅲ発掘調査報告』に鍋倉勝男氏の実測図掲載。
- 5) 県指定有形文化財、横手市金沢八幡神社所蔵。昭和51年より当館に寄託。
- 6) 金足農業高校社会部(1974)：「潟向火葬墓」『金農社会部年報8』
- 7) 小片 保・森沢佐蔵一新潟大学医学部第1解剖学教室(1974)：「潟向遺跡出土人骨概報」
※昭和49年度秋田県立博物館委託調査報告による。
5個の骨蔵器には1個体分づつの焼骨が入り、推

定年令・性別は以下のとおりである。

- 1号〈未成人期・不明〉3号〈未成人期・不明〉
- 4号〈熟年期・男性〉5号〈壮年期・男性〉
- 6号〈壮～熟年期・女性〉
- 8) 潟向火葬墓の骨蔵器はすべて当館で保管。
- 9) 1は当館所蔵、2・3は秋田市谷口重光氏所蔵。
- 10・14) 奈良修介・豊島 昂(1967)：『秋田県の考古学』
- 11) 昭和町歴史民俗資料館所蔵。
- 12) 小武海松四郎(1957)：「井川村南台における上師須恵の骨壺について」『秋田考古学第10号』
- 13) 井川町郷土資料館所蔵。
- 15) 小笠原好彦(1976)：「東北における平安時代の土器について二・三の問題」『東北考古学の諸問題』
※本稿ではあかやき土器を「橙色ないし赤褐色を呈して酸化焰焼成によった土器で、ロクロによる仕上げがなされているもの」と広義にとらえている。
- 16) 第1号のような深い木葉痕がついた甕、6号のような器表面に砂粒が多量に付着した甕は、県北地方での出土例が多い。
- 17) 形態的には山形県遊佐町宮坂火葬墓群のものと類似している。
- 18) 弘田柵跡調査事務所(1975)：『弘田柵跡一昭和50年度発掘調査概報一』
※S K 60土壇内から嘉祥二年(849)の年紀をもつ木筒にともなって、糸切り底で体部にヘラケズリ調整のある明褐色を呈する杯、ロクロ仕上げによる明褐色を呈する甕、ヘラ切り・糸切り底の須恵器杯が出土している。
- 19) 川崎利夫(1962)：「山形県鶴岡市田川七日台の墳墓群について」『歴史考古8』

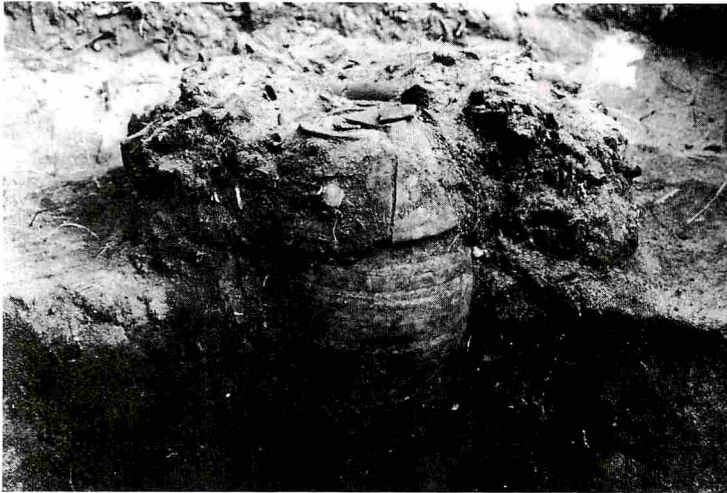
参考文献

- 斎藤 忠(1970)：『日本古代遺跡の研究 総説』
 榎崎彰一(1967)：「古代の墳墓と墓誌」『日本の考古学Ⅶ—歴史時代下—』
 森 浩一編(1975)：『古代文化の探究—墓地—』
 川崎利夫(1976) 「山形県における古代・中世の火葬墓について」『東北考古学の諸問題』
 大和久震平・奈良修介(1960)：『秋田県史一考古編』

潟向火葬墓 7号検出状況



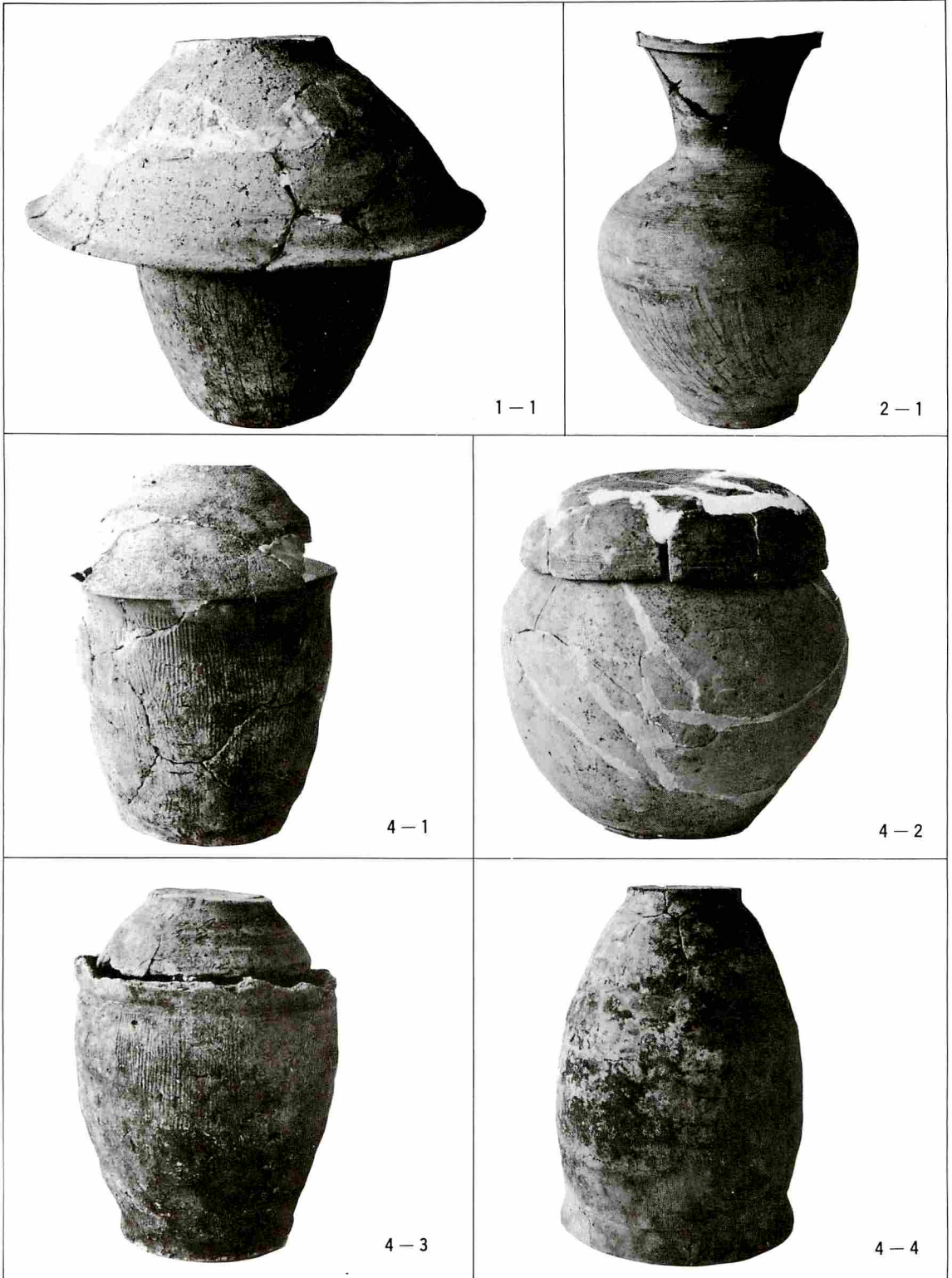
◁骨蔵器を覆う
木炭ブロック



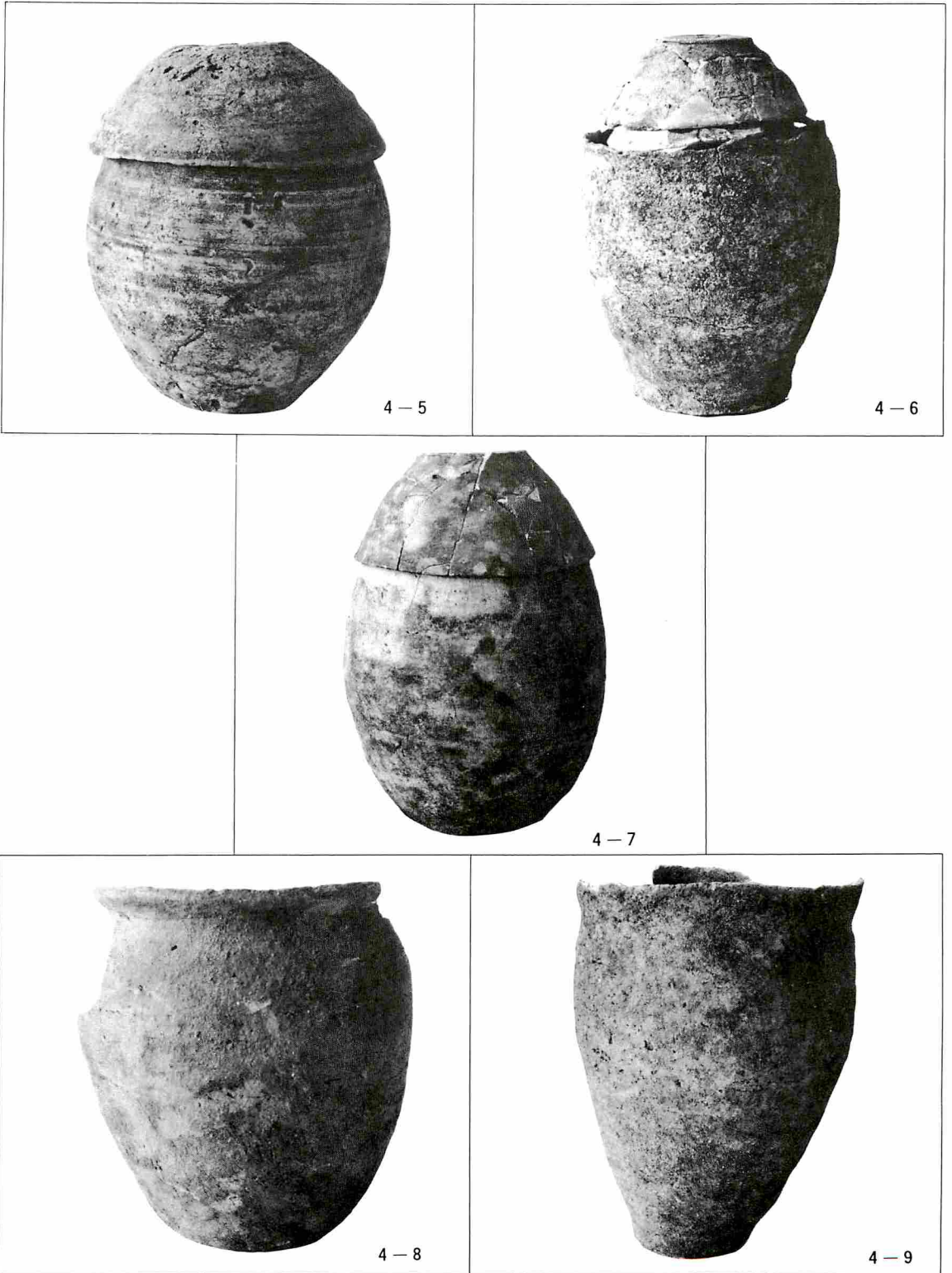
◁木炭ブロックの
西側をよせた状況

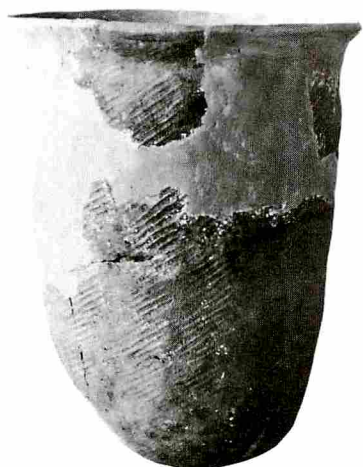


◁骨蔵器の埋設状況

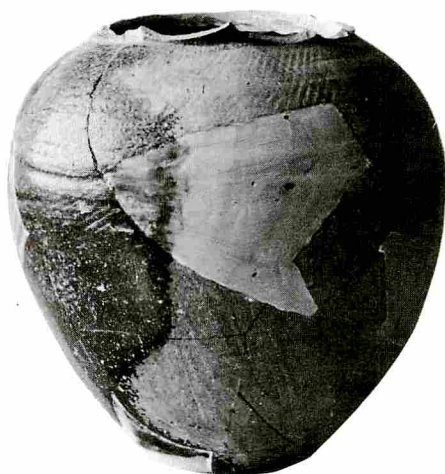


秋田県における古代・中世の火葬墓





5-1



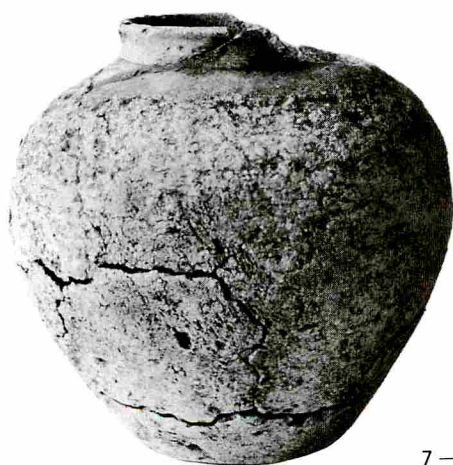
5-2



5-3



6-1



7-1



7-2